

実践報告

チュートリアル科目を通しての学び合いの教育実践

－実践力のある看護職の育成を目指して－

Educational practice of learning through tutorial courses:
Aiming to train practical abilities in nursing professions

飯野矢住代¹⁾, 浜谷千枝子²⁾, 光成 美枝¹⁾, 小出 隆仁³⁾

Yasuyo Iino¹⁾, Chieko Hamaya²⁾, Mie Mitsunari¹⁾, Takahito Koide³⁾

要 旨

チュートリアル教育は、少人数グループでチームによる活動を通じて「自ら問題を発見し、解決を図る」プロセスを体験する。本学では「自己研鑽力」や「問題解決能力」の礎を築く初年度演習科目として位置付けている。筆者は「目的を持って行動できる」、「自ら考えて行動できる」、「共に学び（合い）続ける」の3つを自らの教育理念として大学教育に携わってきた。「チュートリアル」においてもこの3つの教育理念に沿って展開した。本稿では、授業科目「チュートリアル」の教育内容、授業展開にあたっての考え方を紹介する。大学教育における初年次は、高校から大学への受け身から主体的な学びの移行を促すと重要な時期である。入学直後の学生の、人と関わり合いの中での気づき、学び合いの内容を報告する。

キーワード：チュートリアル, 気づき, 学び合い

Keyword : Tutorial, Awareness, Learn from each other

1) 広島国際大学看護学部看護学科 (Faculty of Nursing, Hiroshima International University)

2) 社会医療法人財団白十字会白十字病院 (Hakujuji Hospital)

3) 医療法人真慈会真愛病院 (Shin-ai Hospital)

I. はじめに

チュートリアルとは「個別教育, 小集団学修」といった教育方法の一つである。チュートリアル・チューターと呼ばれる指導教員と学生が一对または一对少人数で行う個別の指導法で、通常、週1回程度の頻度で定期的に設けられることが多く、主として学習指導が中心であるが、生活全般のアドバイス等が行われることもある(今野ら, 2014)。広島国際大学(以下本学)、全学部で1年次前期にチュートリアルという科目を導入している。この「チュートリアル」は、本学の教育課程において「スタンダード科目群」に位置づけられ、主体的・対話的で深い学びを通して、自らの成長を実感できる教育を目指している(広島国際大学, 2022)。また、チュートリアル科目を通して、将来、保健医療福祉分野で活躍する人材に必要な「問題解決能力」や「自己研鑽力」を醸成することをねらいとしている(広島国際大学, 2022)。入学して間もない学生たちにとっては、仲間と協働して学ぶことを体験する機会でもあり(広島国際大学, 2022)、その後の学生の学修への取り組みに影響を及ぼす。

看護学教育では、学内演習や臨地実習をはじめ教育方法の一つとして小集団学修を取り入れ、看護職として必要な知識・技術・態度を学び合いから習得していく。そういったことから、本科目での学びは後の看護学の学修に重要な位置づけだと考える。

今年度、筆者が担当した学生の様子と、授業をどのような考えをもって展開しているのかを紹介し、批判や助言を受けて、これからの教育方法を改善し充実させていくためのステップにしたいと考えている。また、このたびの取り組みが、この先のチュートリアルのあり方についての一助になることを願う。

本稿では、「チュートリアル」科目の教育内容、授業展開にあたっての考え方、学生の気づきや

学び、学び合いについて述べる。

II. 授業の概要

授業計画は、資料1のとおりである。

授業計画立案にあたって最も悩み、検討を重ねるのは、授業の導入にどのような題材を選定し、どのような方法で行うかということである。それは授業の導入で学生の授業への興味関心をどれくらい引き出せるかが、その後の学生の授業への取り組みに大きな影響を及ぼすからである。学生に学修への動機づけすることを学習心理学では「構えの誘導」といわれているが、効果的な場面のひとつとして最初の授業があげられる(De Tornyay, et al., 1982)。つまり最初の授業では学修への動機づけができるようなテーマを選ぶことが重要である。とはいえ、入学間

資料1 授業計画

2022年度 チュートリアル

1. 授業の目的・ねらい
2. 到達目標
3. 評価基準
1~3はシラバス参照
(<https://asm-ediea.com/hirokoku-u/open/ja/syllabuses>)
4. 授業計画

回	月, 日	内容	準備
1	4月7日(木)	-	-
2	4月14日(木)	新入生歓迎会	大学生活について先輩に質問したいこと
3	4月21日(木)	図書館利用説明会	Teamsにて連絡済
4	4月23日(木)	大学探索(図書館探索)	
5	5月12日(木)	文献を読みレポートする	
6	5月19日(木)	発表・ディスカッション 体験学習の説明	
7	5月26日(木)	体験学習	実習室 腕時計持参
8	6月2日(木)	体験学習整理①	
9	6月9日(木)	体験学習整理②	
10	6月16日(木)	体験学習成果発表	
11	6月23日(木)	外部講師① (がん看護専門看護師)	Zoom
12	6月30日(木)	11回を受けてディスカッション	Zoom
13	7月7日(木)	外部講師②(作業療法士)	Zoom
14	7月14日(木)	13回を受けてディスカッション	Zoom
15	7月21日(木)	全体のまとめ 評価	

5. 学修へのアドバイスおよび連絡
 - 1) 配布資料はファイルにし、授業の際、持参する。
 - 2) 連絡方法 Teams「飯野チュートリアル・ゼミ」、Teams個人チャット、メール
 - 3) 5月に入ったら個人面談を実施する。詳細は別途連絡する。

もない学生たちにとって、大学生活は期待と不安を併せ持ちながらのことだろうと推察しながら、学生たちとシラバスを読み込み、どのように進めるか話し合いからはじめた。筆者が担当した6名の学生たちは「身体を動かしながら実施したい」という意見が一致した。先にも述べたが、この科目は全学部で実施していることから、共通の授業の目的、到達目標があり、それらをふまえ、かつ学生たちと創り上げることを思案した結果、学生たちで何もないところから課題をみつけ出すことにせず、こちらから少しずつ「しかけ」ながら、学生たちひとり一人が自ら、かつ、グループで学び合えるようにした。また、2名のゲストスピーカーを迎えた。一人はがん看護専門看護師として福岡市の病院で、もう一人は、作業療法士として東広島市の病院で活躍している。それぞれ2回ずつ筆者と共に担当してもらった。ゲストスピーカーを迎えた理由は、入学して間もない学生ではあるが、看護職としてキャリアを積んでいくことや多職種と協働していくことを早くから意識づけたく考えたためである。それらを叶えるために適したゲストとして、専門看護師や他職種である作業療法士を選出した。また、ゲストたちは地域に目を向けて活動を展開していることも魅力であった。

ゲストたちと筆者は地域社会活動をはじめ交流を行ってきていることから、互いに依頼される関係であり、その中で謝金などは発生しないことにしている。

III. 授業の実際

第4回～14回の授業を紹介する。

1. 第4～6回、大学探索、文献を読みレポートする、発表・ディスカッション

まず、「身体を動かしながら実施したい」と考える学生たちであることから、第4回の授業は大学探索を実施した。主に図書館探索とした。第3回目の授業で、図書館利用の説明会の講義を受けていたことから、それらをふまえ図書館を実際探索してみることにした。同時期に図書館でスタンプラリーを実施していたことから、それらと抱き合わせ図書館司書に協力を得た。図書館探索では、学生と教員でチームを組み、指定された図書を「検索」し「探す」ことを競い合った。学生たちからは「第3回目で説明を受けた内容について実際体験してみて図書の場所がわかった」、「図書館が身近に感じるようになった」と反応を得た。つづいて、第5回は文献を読みレポートする課題を出した。文献としてとりいれた資料は、平成31年度東京大学学部入学式の祝辞（上野，2019）であった。上野千鶴子氏の祝辞であるが、ジェンダーはもちろん大学で学ぶことの意味や様々な観点から考えを広げたり、深めたりできる題材である。学生たちには、資料を読み、レポートすること、レポートした内容は第6回で発表・ディスカッションできるよう準備するようにした。レポート作成にあたっては、広島国際大学「初年次教育」ハンドブック 2022 大学への扉（広島国際大学「初年次教育」ハンドブック，2022，p.32-66）の本・文献の読み方・まとめ方を参照するよう指定し、引用・参考文献を図書館で借りるよう促した。

2. 第7～10回, 体験学修, 体験学修の整理, 体験学修成果発表

第7回～10回では、「同一体位長時間保持体験学修」を実施した。

この体験学修の意図は、自分で動くことのできない人およびその援助（観察も含む）を体験することによって、看護場面において生活を整えることがどのような意味をもつのか、また、看護がその人の自立を助ける役割を担っていることに気がついてほしいと考えたからである。以下に課題と学生たちが整理した内容を紹介する。

1) 学修内容

課題1として、日常生活が制限されて動けない状況を体験、またはそれを観察させた。学生は2名1組となり、動くことができない人役と観察者にわかれて、30分間体験させた。

動くことができない人役は以下の(1)～(5)の条件にした。

- (1) 仰臥位, 側臥位, 車椅子で座位の中からひとつの体位を選ぶ。
- (2) 手足の指先以外は動かさない。
- (3) 開始時の姿勢のまま動くことはできない。
- (4) 時間の確認はできない。
- (5) 苦痛は観察者に訴えていいが、それ以外の発語はしない。

観察者には、以下の(1)～(3)の条件を示した。その中で、(1)は必須条件とし、観察者3名のうち、2名に(2)を、1名に(3)を実施させた。

- (1) 動くことができない人役の表情や態度など様々な反応を観察し、詳細を記録用紙に記載する。

- (2) 観察のみで、動くことができない人の訴えに対応はしない。

- (3) 動くことができない人の訴えに応じて苦痛を和らげる援助を行う（クッションなどの物品を使用してもよい）。

課題2として、課題1の体験をふまえてグループワークを行った。

- (1) 以下の4つの項目にそって付箋紙(以下カード)に学生個人の意見を記載する。

- ①自分の1日(24時間)の生活行動を1行動ずつ記載する。

- ②30分間動くことができない人役または観察者を体験し、動くことを制限された時に感じた苦痛や不快であったことなどを記載する。

- ③動くことを制限され、行動できない人の身体面や精神面における1日の生活リズムや生活行動の変化が起こるかを記載する。

- ④病気や老いなどにより、生活行動が制限された時にはどのような援助が必要か記載する。

- (2) それぞれのカードに記載した内容について話し合い、模造紙に図解する。

- ①カードを読み合わせ、類似した内容のカードをグループ化、それぞれにタイトルを付ける。

- ②グループ化したカードのそれぞれの関連性を検討し、模造紙に図解する。

- (3) 模造紙に図解したものを文章化し、発表をする。

- ①発表は、A教員のチュートリアル授業と合同で実施し1年生5名の学生が聴講してくれた。

表1 自分たちの1日(24時間)の生活行動

日常生活	清潔	自分の時間
起床, 朝食, 昼食, 昼寝, トイレ, 夕食, 水を飲む, 就寝, 料理	着替え, 掃除, お風呂, 歯磨き, 洗濯, 食器洗い, 洗顔, 化粧, ドライヤー, 片付け	勉強, 外出, パイト, 買い物, 散歩, ゴロゴロ(無の時間), テレビ・スマホを見る

表2 体験学習を通し, 身体の制限で感じた苦痛や不快で思ったことや考えたこと

観察者からの視点	患者の思い	患者の身体の変化	疑問点
<ul style="list-style-type: none"> ・目がよく動いていたので, 退屈が伝わった. ・肩や手が動くことが多かった. ・意思を伝えてもらって初めて痛い部分などに気が付いた. もっと表情を観察すべきだと思った. 	<ul style="list-style-type: none"> ・自由に動きたい. ・時間が長く感じた. ・人がそばにいて, 話しかけてくれると安心する. 嬉しい. ・周りに変化に敏感になっていた. ・自分のして欲しい体勢にしてもらう際, 伝え方が難しい. 	<ul style="list-style-type: none"> ・体の変なところに力が入って体が痛い. ・お尻や腰が痛い. ・ずっと同じ体勢はきつい. ・話しかけたり体の向きを変えたりすることで気分転換になると思った. 	<ul style="list-style-type: none"> ・体を動かしたいけれど, 自分の意思が伝えられない人はどうやって看護師としてくみ取ればよいのか.

表3 身体を制限され, 何も行動できない人の1日の生活リズムや生活行動における身体的・精神的変化について考えたこと

自由	体力	世話	退屈	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・スマホが見られない. ・自分の好きなことが制限される. ・自分でしたいことができずストレスが溜まり, 辛い. ・生きがいを失ってしまうかもしれない. 	<ul style="list-style-type: none"> ・身体を動かすことができないため筋力が低下する. ・筋力が低下し, ひとつの行動もつらくなる. ・一日中同じ体位のため身体が痛い. 	<ul style="list-style-type: none"> ・お風呂に一人では入れないため介助をしてもらうことに抵抗がある. ・トイレを人に見られるのが嫌だ. ・全て自分の世話をしてもらって申し訳なくなりそう. 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみがない. ・毎日が退屈. ・一日が長く感じる. ・病院内でできる趣味を見つけないと一日が暇そう. 	<ul style="list-style-type: none"> ・元の生活に戻ろうとしたときに多くの時間が必要になる. ・孤独になってさみしい. ・毎日同じ人と接するため, 他の人とコミュニケーションがとりにくくなる.

表4 病気や老いなどにより、生活行動が制限や障害がある人に対する援助で考えたこと

自由	体力	世話	退屈	その他
<ul style="list-style-type: none"> ・全てを手伝うのではなく、その人ができることなのであれば見守る。 ・なるべくその人の意見を尊重する。 ・家族の方と触れ合う時間を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレッチなどをして筋肉が固まらないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体勢を変える手伝いをする。 ・1日中寝たきりの方に車いすに乗せて院内や外を一緒に歩く。 ・日光を浴びる時間を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外の景色を見たり風にあたりできるようにベッドを窓際に置く。 ・話しかけて患者さんがしたいことを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その患者さん特有の目の動きや顔の表情を読み取れるようにする。

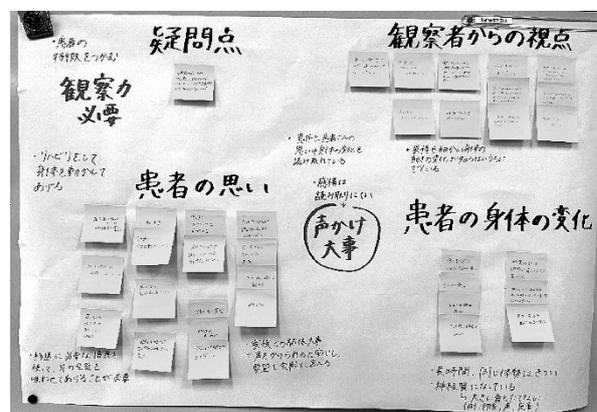
資料2 グループ化した内容の関連性を検討し、看護職の役割

- ・表情や細かい身体の動きの変化が知らないうちにでており、動くことができない人の思いや体の変化を読み取れていることに気がついた。看護師は、患者の特徴を掴むことが大切であり、観察力が必要であると考えた。
- ・長時間の同じ体勢は辛く、神経質になっているため、大きな音を立てない(例：物音、声、足音)ことが大切である。
- ・患者はそれぞれ様々な要望を抱えているため、その人の要望に合わせた援助を行うことが大事である。
- ・身体が動かせない人は、筋力低下を予防したり気分転換したりできるようにリハビリをして身体を動かす。
- ・移送に必要な道具を使って外の空気を吸ってもらい、気分転換を図る。
- ・全て共通していえることは、『声かけが大事』であるということである。

写真1



写真2



資料3 発表を聴講してくれた学生の反応

- ・新たな発見や発表の工夫などを学ぶことができた。
- ・一人ずつの意見を生かしている発表であった。
- ・自分が体験することで、わかりえなかったことに気づくことができ、もっと患者さんにできる声かけやサポートを増やすことができることを学んだ。
- ・人前で発表したり自己主張したりするのが苦手だが、皆が落ち着いて発表している姿を見て、自分の意見を少しずつでも自信をもって発表していこうと思った。

資料4 聴講者の反応を受けて、発表者の学生の反応

- ・自分たちの意見について、患者経験のある人から共感してもらえて、嬉しかった。
- ・人に発表することをもっと意識して、意見のまとめ方などもっと学修したいと思った。
- ・他者の意見をより多く聞けて、看護としての視野が広がった。

写真 3



3. 第11～12回ゲストスピーカーによるオンラインでの授業①

授業は、Web会議システム（Zoom）を使ったオンライン形式による遠隔授業とし、学修目標は、以下のように考えた。

医療機関に勤務するがん看護専門看護師の実務経験をもとにした語りと学び合いを通し、自らの看護職としてのキャリアについて考えることができる（第11回）。

看護職としてのキャリアに対する探求した内容をもとに、どのような看護職を目指すのか、自らが目指す看護職になるためにどのような自分であるべきかをさらに考えることができる（第12回）。

1) 第11回 看護職としてのキャリアの探求

看護師（職）は病院だけではなく、地域の訪問看護ステーション、在宅診療所、介護施設、行政、大学等の教育機関など様々な場所で、また多くの分野や領域で活躍している。このように、一言に看護師（職）といっても、様々な分野や可能性がある。授業では、スペシャリストコースをキャリア・パスとして選択した講師の経験から、自らの可能性に気づき、看護師（職）としてのキャリアを探求できる内容で構成した。座学を中心とし、授業の終わりに学生に一言ずつ感想、意見（疑問）を語ってもらい、学びの共有と疑問点の解決を図り、次回講義の課題を提示した。

はじめに、オリエンテーションとしてパワーポイントを用い、第 11 回の授業の目標と内容を示し、授業の目的・目標を理解してもらい、次に学生に簡潔に氏名、どんな看護師になりたいかを一言ずつ自己紹介してもらった。授業内容は、講師の現在の仕事内容、看護師を目指した動機から看護学校を卒業してから看護師としてどのような経験を積んだのか、その後大学編入やがん看護専門看護師を目指し、現在至るまでの過程、臨床現場で働くがん看護専門看護師の仕事内容と役割を理解する内容を中心とした。まず日本看護協会 (<http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cns>) より、専門看護師の制度・役割・専門看護分野・専門看護師への道、分野別都道府県登録者数を紹介した。学生は、入学から 2 カ月を過ぎたばかりで、十分な看護師（職）像は描き切れていないと考えた。より現場の仕事内容のイメージが掴めるよう、がん看護専門看護師の役割が紹介されている動画を視聴、がん看護専門看護師の実務経験、生きた語りとして伝えることを心がけた。特に、専門看護師の 6 つの役割（実践、相談、調整、教育、倫理調整、研究）をどのように臨床現場や社会の中で発揮しているのかを具体例を挙げて伝えた。さらに学生に自分の将来の可能性や看護の魅力を感じてもらえるよう、仕事に対する責務や役割だけでなく、役割を通して成長できたと感じたこと、忘れられない患者・家族・スタッフ・恩師との出会いなどについても紹介した。

授業の終わりに、授業で学生が何を感じたか、自分が描く理想の看護師（職）について発表し合い、学びを共有した。学生が自ら思考し発言する場をつくることで、授業への主体的な参加を促した。学生は自ら素直な感想を述べ合うことができおり、「患者と医師や多職種の間でがん看護専門看護師が患者の思いを橋渡しするこ

との大切さや難しさを知った」、「医師と協働することで患者への告知後の心理的負担を軽減する役割に気づいた」といった声が聴かれた。

2) 第 12 回 よい看護師とは何か？目指す看護師（職）になるために大切なことは？

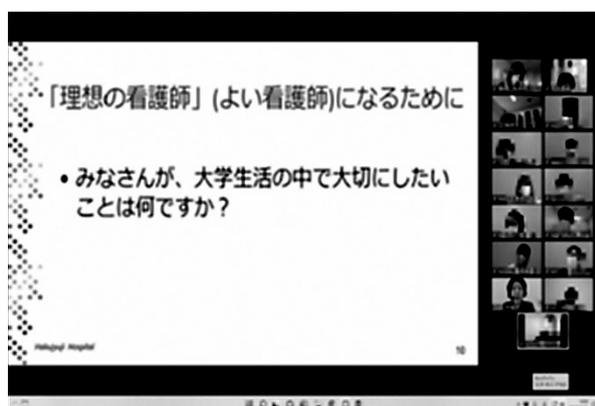
第 11 回で学生が描いた、目指す看護師（職）像に近づくための自らのあり方を探求するために、授業はディスカッション中心の内容とした。探求するための手がかりとして、“患者からみた「よい看護師」：その探求と意義”（小西，2006）を教材とした。論文を考える手がかりにすることは、チュートリアルのねらいとしている生涯学習にも繋がる「自己研鑽力」「問題解決力」の醸成に繋がると考えた。教材は、授業前に学生に配布し、事前に読んで授業に臨むことを課題とした。

授業の導入は、第 11 回の振り返りとして、学生自身が“目指す看護師像”を意識化させ、実現するために何が必要かを考えることを意図し、前回の授業で感じたこと、考えたことを発表してもらった。

授業の中心は、学生が考える「よい看護師」、「よくない看護師」、患者から見た「よい看護師」、「よくない看護師」について教材で論じられている内容との共通性と違いを読み解き、学生が新たな視点で、“目指す看護師（職）”を見出すことに重点を置いた。教材で示されている患者から見た「よい看護師」の特質は、“「人として」の関わり”ができると、“プロとしての関わりができる”という結果であった。教材から、学生が何を感じ、考えたかを発問により引き出した。学生からは、看護師としてだけではなく、患者は人としての自分を見ていることを気づき、患者や家族を大切にしていると感じてもらうためには、プロとしての姿勢が欠かせないことなどが語られ、“目指す看護師（職）”への洞察を深

めている様子が伺えた。次いで、“目指す看護師（職）”になる（近づく）ための方略を、学生に意見を出し合い発表してもらった。そこでは、“大学生活で看護学以外の学び（教養）を深める”、“学生同士・教員に対し常に思いやりや気遣いの気持ちを持つ”といった意見が聴かれ、学生は“目指す看護師（職）”像をより具体化させていた。さらに目指す看護師（職）になるための心構えや学びの姿勢について新たな考えが引き出されていた。筆者は看護職の経験者として、教材で示されている「よい看護師」、「よくない看護師」について、経験をもとに、具体例や自らの心がけや姿勢を語ることで、臨床での実践のイメージができるよう心がけた。授業後、学生から「教材がとても興味深く論文を読むことの楽しさや大切さを知った」、「患者がよいと思うことと看護師がよいと思うことは違うことを知った」、「患者にとって何がよいかを理解することが大切」といった感想が聴かれた。

写真 4



4. 第13～14回ゲストスピーカーによるオンライン授業②

授業は、Web 会議システム (Zoom) を使ったオンライン形式による遠隔授業とし、授業のねらいは以下のように考えた。授業では、「チームの役割」と「チームについて考察できる機会」

をつくることにした。学修内容は、多様性の理解、リーダーの役割とリーダーシップの種類、組織の成り立ちと組織運営をシミュレーションすることを組み込んだ。また、防災・減災、慢性期病院の役割についてオプションとして入れた。学生たちには、組織・チームについて学び、様々な場面で課題を発見できるようになってほしいと考え実施した。

1) 第13回 ダイバーシティ・インクルージョン

授業の導入では、多様性の大切さを説明し個々の役割について考える機会を作った。多様性について体験させる目的で「大学」と「自分」の関係を二つの丸で表現することを取り入れ、発表した。発表では、「大学」と「自分」二つの丸が重なりあっている学生もいれば、「大学」の丸が大きくその中に「自分」が小さい丸として表現している学生もいる、「大学」と「自分」二つの丸が重なることなく表現する学生もいた。これらの考え、発表から価値観の多様化やそれらを受け入れて活かしていくことについて話し合った。さらに「ダイバーシティ」と「インクルージョン」の考え方について説明を加え、これらは看護職を志す人たちには重要であることを伝えた。

学生たちからは、「相手の立場になって考えることの難しさと大切さを学んだ」という反応がみられ、立場により捉え方、考え方が違うことを考える機会となったようである。

2) 第14回目 リーダーとリーダーシップ・組織づくり

授業の導入では、第13回目の授業内容の多様性ふりかえり、リーダーとリーダーシップの違い、種類、組織づくりについて考える機会を作った。演習では、「コーチング」の自分のタイプを知る機会を作り（鈴木、2014）、理想のチーム

作りを考えた。リーダーの役割を理解することは、今後どの場面でも必要なことである。

学生から「リーダーとリーダーシップの違いについて理解できてとてもよかった。リーダーには絶対になりたくないと考えていたが、リーダーを立候補する機会があればやってみようと考えよう」という反応がみられ、今までの経験を考えなおす機会になったようである。

写真 5



IV. 考察

「チュートリアル」科目の教育内容、授業展開にあたって考え方、学生の気づきや学び、学び合いについて述べてきた。ここではさらに詳しく授業の考え方や展開を述べながら考察したい。

まず、筆者が大学教育で教育理念としてきたことは、3つある。一つ目は「目的をもって行動できる」、二つ目は「自らで考えて行動できる」、三つ目は「共に学び(合い)続ける」である。これらをふまえ、実践力のある看護職を大学で育てたいと考えてきた。

まず、「目的をもって行動できる」に関しては、授業の導入時、本科目の目的、到達目標、授業の全体像を示している。その中で、目的と目標の関係、到達目標と方法の関係、目的、目標が到達できるように毎回の授業があること、講義、演習、実習の関係性、つながりを意識して、実

践力のある専門職として社会で活躍してほしいことを伝えている。その際、例えば、アリの目、鷹の目、魚の目の話をしている。それによって、学生たちには、自分たちが向かう先を理解し、意識して、取り組み、進んでほしいと伝えている。また、先の見えた関わり、あらかじめ全体像のみえる資料の提示などを通して、学生自身がスケジュールを調整できるよう指導している。また、資料に立ち戻り考えることを繰り返させるが、これらは、専門職として自立・自律することにつながると考えている。

授業をはじめ学生との関わりでは、目的を明確にしながらか実施していくことは、専門職として対象者と関わる際はもちろんのこと、チーム、多職種で協働する際にも有効であると伝えている。目的の明確化は、授業の目的、目標だけではなく、授業に参加するにあたってのルールとしても提示している。それは、それぞれが与えられた役割を果たし、質の高い仕事(目的達成)のためのチームとして一緒に実践していくことにつながると考えているからである。

次に、「自らで考えて行動できる」では、「思考を整理する」、「丁寧に実施する」ことを意識し実施してきた。中でも、現状を事実と解釈とわけて話す(説明)ようにし、そこから整理して、問題や課題が提示できるようにしてきた。問題や課題が整理できれば、解決にむけて進めていくことができる。そこには、根拠となる正しい文献などで説明できることが必要であり、この解決に結びつけていく思考は万能な方法だと学生たちに繰り返し伝えている。

また、既習学習や体験、経験を想起しながら、意見交換し、積み上げることを意識するよう「しかけ」、毎回、授業の導入で、前回のふりかえりと他科目(既習学修)との関係で思い出されること、考えること、自身の体験や経験で思い出されること、考えることを整理することからは

じめてきた。先にも講義、演習、実習の関係性、つながりを意識することを述べたが、このように「想起」「積み上げを意識」「既習学修との関係」を考えさせることは、知識と知識を関連づけることになり重要である。これらは、本科目の目指す「主体的・対話的で深い学び」の「深い学び」が示すものと合致すると考えている。さらに、学生たちには意見交換、他者の考えを聴く、各自の考えを再考することを繰り返してきた。学生たちには自由に発言させることもしながら、ところどころ「なぜ、大学で学ぶのか」学生たちに問いかけ、やりとりをしながら行ってきた。学生とのやりとりの最後には、大学で学ぶ人たちは「リーダーシップ・メンバーシップをとれる」、「自分の役割を理解できる」、「自分の役割をことばにできる」、「発言できる・発信できる」、「教養科目、専門教育、自分の体験や経験をふまえて説明できる（根拠）」、「対象は幅広く、深いことから教養は大切」であると伝えている。

さらに、大学の四年間で、基礎・基本に基づき、自身の看護を創造し続け、自分の看護を語れることが目標であること、創造には「力、協力」が必要であり、それが「大学生の責任」であることも伝えている。さらに「大学生の責任」については、大学での学びや生活については大学教員から管理されるものではないこと、言い換えれば自分で管理する「自由と責任」があることも含め伝えている。これらは、本科目を通してねらいとしている「問題解決能力」や「自己研鑽力」につながると考えている。

これらのことは、授業ごとに意識して適宜「しかけ」ている。また、筆者は、この科目に限らず、他授業時をはじめ学生との関わりの中で意識している。これらの考えの原点は Vygotsky (1934) の理論である。Vygotsky (1934) は、知的な能力は他者との関わり合いの中から発生

すると述べており、学修は他者との協調関係の構築プロセスで発生するものと考えられている。中でも、最近接発達領域 (Zone of Proximal Development 以下 ZPD) は、「子どもが自分一人で達成できる水準」と「他者の助けがあれば達成できる水準の間」を ZPD とし、「助けがあればできる」、「次からは一人でできる」という考えである。これらは、ひとり一人の学生をつぶさに観察、理解を深めることから、チュートリアル科目のような小集団学修には望ましい。また、深い学生理解によって、学生の学びの支援を高めるとともに学生のアセスメントにもつながると考えている。

今回の授業では、入学して間もない学生たちの関わりの中では、Vygotsky (1934) 考えを意識してきた。我々教員は、学生たちが学び合えるよう「しかけ」ることが必要であり、学生たちの学び合いから我々教員も「学ばせられる」という視点が肝要だと考えている。

つづいて、第 7～10 回、第 11 回～12 回目の授業について考察を加えたい。

第 7～10 回、体験学修、体験学修の整理、体験学修成果発表では、先にも述べたが、この体験学修の意図は、自分で動くことのできない人およびその援助（観察も含む）を体験することによって、看護場面において生活を整えることがどのような意味をもつのか、また看護がその人の自立を助ける役割を担っていることを気づいてほしいと考えたことである。学生が感じたり、考えたりしたことは、自分で動くことができない人の身体面、精神面の苦痛である。体験学修の気づきから、看護師としての役割を見出している。それらは、大学での学修と自己の体験や経験をふまえながら考えている。学生体験学修での気づき、疑問、思いなどは今後の授業に関連させながら学修に取り組んでほしい。看護師を志して入学してきた学生に、看護

師は何を行うのか、どんな役割を担っているのか、などを考えさせるには効果的な方法だと考える。

第12回で使用した小西ら(2006)の論文は、入院経験を持つがん患者に「よい(よくない)」看護師にまつわる体験談の内容を質的手法で整理・集約したものである。この論文の内容の主題は「徳の倫理」とされ、徳の倫理とは、行動するその人に焦点を当てるものである。看護実践の場面でいえば、「私は看護師としてどのような人であるべきか」、あるいは「こう考え、このようなことをしている私はよい看護師といえるだろうか」と問いながら、看護師としての資質や特性、看護の行為者としての自分のあり方を考える(小西ら, 2021, p.24-25.)とされている。初学者である学生にとって「よい看護師」とは何かという徳の倫理に関する問いは、倫理綱領や倫理原則を知らなくても、看護倫理を身近に感じられると考えた。この論文の中では、

「従順」に仕事をする看護師ではなく、「医師の説明を補い」、「(患者である自分のために)意見を言い」、「研鑽」し、「プロとしてのプライド」を持つ看護師に患者らはよさを認めていた(小西ら, 2006)。実際にディスカッションでは、学生から自分が考える「よい看護師」と患者の考える「よい看護師」の共通点や違いについて多くの語りが聴かれた。論文の内容が興味深い、面白いといった感想も聴かれ、学生にとって興味・関心が持てる内容であったと考えられた。

第11～12回の授業を通し、学生は看護師(職)としてのこれからのキャリアを思い描き、「よい看護師」が備えるべき資質とは何かを考えるきっかけとなっていたと考える。オンライン形式での授業であったが、授業では頷きながら話を真剣に聴くこと、進んで自分の意見を発表するといった様子見られた。授業の中で学生同士、学生と講師とのディスカッションでは、自分以

外の考えを知ることが、看護に対する内発的動機付けを高めることに繋がる学習機会となったと考える。また、この授業後に看護学概論で倫理綱領や倫理原則を学修するため、これらの学修をふまえ関連づけて学びを広げ深めてほしいと考えている。

V. おわりに

今年度、筆者が担当した学生の様子と、授業をどのような考えをもって展開しているのかを紹介した。先にも述べたが、批判や助言を受けて、これからの教育方法を改善し充実させていくためのステップにしたいと考えているため、忌憚のないご意見をお待ちしている。Vygotsky(1934)が「人はどのように学ぶのか」非常に興味を持ったと同じように、筆者たちも学生たちの学びに興味を持ちながら、今後も学生たち「しかけ」、ともに学んでいきたい。

付記

本論文の分担執筆は以下のとおりである。

「Ⅰ. はじめに」「Ⅱ. 授業の概要」は飯野矢住代、「Ⅲ. 実際」は1. 第4～6回、大学検索、文献を読みレポートする、発表・ディスカッションを飯野矢住代、2. 第7～10回、体験学習、体験学習の整理、体験学習成果発表を光成美枝、飯野矢住代、3. 第11～12回を浜谷千枝子、飯野矢住代、4. 第13～14回を小出隆仁、飯野矢住代、「Ⅳ. 考察」飯野矢住代、浜谷千枝子「Ⅴ. おわりに」は飯野矢住代が担当した。すべての著者は論文作成に関与し、最終原稿を確認した。

引用文献

広島国際大学(2022)。「初年次教育」ハンドブック大学への扉、広島国際大学、広島。
小西恵美子, 和泉成子(2006). 患者からみた「よい看護師」: その探求と意義, 生命倫理,

vol.16(1), 46-51.

小西恵美子編 (2021). 看護学テキスト NiCE 看護倫理 (改訂第3版) よい看護・よい看護師への道しるべ, 南江堂, 東京.

今野喜清, 新井郁男, 児島邦宏編 (2014). 第3版学校教育辞典, 教育出版, 東京.

広島国際大学 (2022). 2022年度入学者・学則適用者対象, 履修申請要領, 看護学部看護学科 薬学部薬学科 健康科学部医療栄養学科, 1.

広島国際大学 (2022). チュートリアルシラバス, 2022年9月10日引用 <https://asm-ediea.com/hirokoku-u/open/ja/syllabuses>.

東京大学 (2019). 平成31年度東京大学学部入学式の祝辞, 2022年9月10日引用 https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html.

De Tornyay, R. & Thompson, M. A. (1982, *Strategies for Teaching Nursing*)/中西睦子, 荒川唱子 (1993). 看護学コーチングのストラテジー, 医学書院, 東京.

鈴木義幸 (2014). コーチングのプロが教える「ほめる」技術, 日本実業出版, 東京.

Vygotsky, L. S. (1934, *Thought and Language*)/柴田義松 (1962). 思考と言語 上, 明治図書出版, 東京.